

大阪商業大学学術情報リポジトリ

文化施設の利用と幸福度に関する研究

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 大阪商業大学比較地域研究所 公開日: 2018-05-18 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 原田, 禎夫, 伊多波, 良雄, HARADA, Sadao, Itaba, Yoshio メールアドレス: 所属:
URL	https://ouc.repo.nii.ac.jp/records/560

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



〔資料〕

文化施設の利用と幸福度に関する研究*

亀岡市文化資料館の利用に関するアンケート調査結果から

原 田 禎 夫
伊多波 良 雄

1. はじめに
2. 調査の概要
3. 亀岡市民の幸福度に影響を及ぼす要因：基本型について
4. 亀岡市に対する評価と資料館利用の関係
5. 亀岡市文化資料館の利用状況と幸福度の関係
6. 自由意見の内容
7. おわりに

1. はじめに

近年、厳しい自治体の財政難の中で、文化行政のあり方が大きく問われている。一口に「文化行政」といっても、その範囲は遺跡の発掘、資料や史跡の保存といった文化財保護から、芸術文化の振興や文化施設の運営などその範囲は非常に多岐にわたる。言うまでもなく文化はその地域が固有に育んできたものであり、永続的な地域の発展のためにもその伝承や振興に大きな意味があることは論を待たない。しかし、文化行政は定量的な成果の測定や評価が極めて困難であり、そのことが原因となって厳しい財政難のなかで真っ先に予算削減の対象となることも少なくない¹⁾。また、近年では老朽化した施設の更新のための多額の予算が確保できず、規模の縮小や場合によっては休廃止されることも少なくない

*本稿の執筆分担は次のとおりである。アンケート票の設計は原田と伊多波が、アンケート調査の分析は伊多波が、考察は原田がそれぞれ担当した。また、本研究の実施にあたっては亀岡市夢ビジョン推進課と亀岡市第4次総合計画～夢ビジョン～シンボルプロジェクト「自然・文化 次代継承」プロジェクトチームのみなさまに多大なご協力をいただいた。ここに記して、謝意を表す。

1) 「地方における文化行政の状況について（平成25年度）」によれば、平成4年度には全国の都道府県と市町村の文化関係経費の合計は約8,215億円であったが、平成25年度には3,638億円にまで減少している。

く、地域における文化の伝承は危機的な状況にある。

文化遺産を含めた、文化的な財 (cultural goods) は公共財的な性質を備えていることが多い。すなわち、文化的な財は市場価値だけではなく、排除不可能で非競合的な価値をもつ。Frey (1997) はこうした文化的な財がもつ非市場的価値として、オプション価値 (option value)、存在価値 (existence value)、威信価値 (prestige value)、遺贈価値 (bequest value)、教育価値 (educational value) を指摘し、なんらかの形で公共政策の必要性を述べた。また Throsby (2001) は、文化的な財やサービスを「創造性」「知的所有権」「象徴的な意味」の3つの要素に関わるものと定義した。そして、美術館を例に文化的な財を準公共的な財と位置づけ、その存在そのものが雇用や所得の創出をはじめは他の経済に様々な正の外部性をもたらすことを指摘し²⁾、文化的な財を公平に供給するための必要な公共政策の手段として「公的所有」「資金援助」「直接規制」「教育と情報の提供」を挙げた。

しかし、文化施設がどのような役割を社会の中で果たしているのかについての定量的な研究はこれまであまりなされておらず、既存の研究ももっぱら行政評価の枠組みの中で行われることが多かった³⁾。経済学的な観点からの文化的な財の定量的な評価に関する研究としては、CVM (仮想市場評価法) を用いた経済的な価値の推計が多くなされてきた。例えば垣内・奥山・寺田 (2009) では美術館の経済的価値が、池内 (2003) では公共図書館の経済的価値の推計がなされている。また、垣内・吉田 (2002) では富山県五箇山の合掌造り集落の保全に関する支払い意思額の推計をもとに、遺贈価値や審美的価値、歴史的・文化的価値が支払い意思額にも有意に影響を与えていることを指摘している。しかしながら、CVM はその特性上、バイアス問題は避けられず、その回避は依然として大きな課題である⁴⁾。

こうした中で、近年注目を集めている評価手法として、幸福度 (または幸福感) を用いた社会・経済活動を評価する試みがある⁵⁾。これまでの多くの先行研究においても、経済成長が必ずしも人々の幸福の増進につながらない「幸福のパラドクス」(Easterlin, 1974) の存在が認められており、どのような要因が人々の幸福度に影響を及ぼすのかについて研究が蓄積されてきた⁶⁾。近年では日本においても政府や一部の自治体で幸福度を定

2) こうした文化施設の持つ外部性については多くの研究がなされている。一連の先行研究のサーベイについては池上 (2000) や田中 (2008)、林 (2012) に詳しいので参照されたい。

3) 大橋 (2006) では島根県を中心とした文化施設の指定管理制度の導入を事例に、文化施設自らがその存在意義や社会的必要性を外部に積極的に説明し、地域において支持層を拡大する必要性を論じている。また、小野・小島 (2007) は、自由記述式のアンケートを元に文化施設の利用状況と満足度の相関関係について分析し、施設の類型ごとに異なる満足度が提供されている可能性を明らかにしている。

4) 澤村 (2010) では、CVM の有効性を指摘しつつ、CVM では時系列的な評価が不可能であることから統計データも援用することで、長野県妻籠宿を事例に街並み保存の経済効果を実証するとともに、その効果が長期的に続くことを示した。

5) 日本における近年の幸福度の研究の成果については大竹・白石・筒井 (2010) や橘木 (2013) を参照されたい。また、幸福度の測定方法についてはポータヴィー (2012) や経済開発協力機構 (2015) に詳しい。

6) Easterlin (1974) は、一カ国や一時点では人々の所得と幸福度との間に正の相関関係が確認されるものの、多国間の比較では、国の所得水準と人々の幸福度との間には必ずしも相関関係が見られるとは限らないことを指摘した。

量的に測る取り組みが始まっており、人々の幸福度は必ずしも経済的な豊かさによってのみ実現されるものではなく、地域の文化や歴史、あるいはそれらによって育まれる誇りといったことも人々の幸福度に大きな影響を与えていることが明らかになっている。これは Frey (1997) が指摘した文化的な財の非市場的な価値が持つ効果ともいえ、今後はこうした観点からも文化行政を評価する必要がある。

そこで本研究では、京都府亀岡市を調査対象地として、地域の文化行政の根幹をなす亀岡市文化資料館が住民の幸福度にどの程度貢献しているのかを定量的に明らかにすることで、自治体を取り組むべき文化施設の運営のあり方を提言する⁷⁾。本稿の構成は次の通りである。2節では調査の概要とデータについて、3節から6節ではいくつかの手法に基づく分析結果とその解釈について述べ、7節で本稿のまとめとする。

2. 調査の概要

本研究で調査対象とした京都府亀岡市は、京都市の西隣に位置し、奈良時代には国府が置かれるなど、古来より丹波地方の中心として栄えてきた。さらには国の特別天然記念物であるアユモドキの琵琶湖・淀川水系唯一の生息地であるなど、豊かな自然資源にも恵まれた場所である。こうした中、亀岡市文化資料館（以下、資料館）はこの地域の歴史と文化、そして自然について紹介することを目的として1985年に開館した。以来、資料館は亀岡市の文化行政の拠点と位置付けられ、各種資料の収集や保管、また様々な市民向け事業に取り組んでいる⁸⁾。

しかし、現在の資料館は1974年に亀岡女子技芸専門学校の校舎として建設されたものを転用したもので、所蔵資料の増加とともに手狭となっており、また耐震性の問題などもあって、新資料館の建設に向けた議論が2010年ごろより文化資料館友の会を中心に始まった。こうした中、一般公募で集まった市民と市役所職員が亀岡市のまちづくりに取り組む「第4次亀岡市総合計画『夢ビジョン』シンボルプロジェクト・自然文化 次代継承チーム」（以下、シンボルプロジェクト）でも、その活動の一環として、新しい資料館のあり方が議論され、市民アンケートを実施することとなった⁹⁾。

今回の調査では2013年9月13日から30日を調査期間とし、調査対象者は亀岡市内に住む

7) 本稿では幸福度と満足度を同じものとして扱うこととする。

8) 博物館は公立、私立とも、所管地域の教育委員会の登録を受けることで博物館法上の博物館となり、これを「登録博物館」と呼ぶ（博物館法第10条）。登録博物館ではないが、それに相当する施設として教育委員会の指定を受けた博物館を「博物館相当施設」と呼ぶ。「登録博物館」「博物館相当施設」以外の博物館は、博物館法では規定されておらず、文部科学省の統計などでは「博物館類似施設」と呼ばれている。また、博物館の施設や設備が一定の条件を満たしている場合、文化財の公開に適した施設として文化庁長官の承認を受けることができると規定されており（文化財保護法第53条）、これを「公開承認施設」という。現在の亀岡市文化資料館は「類似施設」に区分されており、現在議論されている新資料館構想では国宝や重要文化財として指定されている資料についても収蔵や保管、展示ができる「登録博物館」あるいは「公開承認施設」レベルの施設を目指す、とされている（亀岡市新資料館構想策定委員会 2016）。

18歳以上の市民から約2,000人 を無作為抽出し、郵送法でアンケート調査を行った。アンケート票の回収数は789通であり、そのうち有効票数は783通である。また、回答者のうち男性が39.15%と女性の方が多く、年齢構成は60代と70代がやや高いがおよそ亀岡市の年齢構成と同じであった。

アンケート調査の記述統計は別表1の通りである。今回の調査では、回答された項目と社会経済的要因（性別、年齢、所得、居住年、学歴、職種）の間に一般的な関係を見出すことはできなかった。その中で、「新資料館」について5段階での評価を求めた以下の設問において、

問8 亀岡市民以外の方を案内したくなる「新資料館」とは（複数回答可）

問9 「新資料館」で、亀岡に関して学びたいこと（○1つ）

問10 「新資料館」の事業で、利用・期待すること（○1つ）

問12 「新資料館」に展示機能以外で望む施設（○1つ）

幸福度が高いほど、より高く支持する傾向が見られることが興味深い。

3. 亀岡市民の幸福度に影響を及ぼす要因：基本型について

次に、被説明変数を幸福度、説明変数を性別、年齢、居住年数、所得、学歴、就業形態とし、どのような要因が亀岡市民の幸福度に影響を及ぼしているのか順序ロジット分析を用いて分析した¹⁰⁾。なお、幸福度の無回答者、年齢の無回答者および居住年の無回答者は分析の対象外にしている。結果は表1に示されている。これから次のことが言える。

- (1) 女性の幸福度が高い。
- (2) 年齢が増えると幸福度が低下する。40歳頃で反転し、その後は幸福度が増大する。
- (3) 居住年の係数はマイナスであるが統計的には有意ではない。つまり、居住年の長さは幸福度に影響を及ぼさない。
- (4) 所得が高いと幸福度が増大する。
- (5) 学歴が高くなるほど幸福度が増大する。
- (6) 職業の幸福度に及ぼす影響は自営業主を除いて統計的に有意でない。正規雇用の正

9) シンボルプロジェクトは、「第4次亀岡市総合計画～夢ビジョン～」（2011～2020）において、において「市民・団体・事業者・行政」の協働により議論・企画・提案し、新しいまちづくりに向けた取り組みを進めることを目的に創設された。前期基本計画（2011～2015）では「自然・文化次代継承」、「住み心地向上」、「にぎわい創出」の3つのプロジェクトが置かれ、様々な取り組みが進められた。

10) 順序のある複数の選択肢からひとつ選ぶとき使われるモデルである。たとえば、調査では、生活に関する全体の満足度に関して「不満だ」「やや不満だ」「どちらでもない」「まあ満足している」「満足している」の5つの選択肢からひとつの選択肢を選択させている。この時、5つの選択肢には順序関係が存在する。性別や所得などの回答者の属性が満足度の程度を決めると考えるとき、満足度は被説明変数、性別や所得などの属性は説明変数と呼ばれる。このように、被説明変数が順序変数のとき、説明変数がどれくらい被説明変数を説明しているかを分析する手法として順序ロジットモデルがある。また、被説明変数が2つの値を取るとき、たとえば、「文化資料館を利用する」と「文化資料館を利用しない」のいずれかを選択するとき、性別などの属性がどのくらい選択に影響を及ぼしているのかを分析する手法として二項ロジットモデルがある。

社員・正職員に比べて、自営業主は幸福度が高い。

以上の関係は、橘木（2013）などこれまでの幸福度分析で得られている結果とほぼ同じである。

表 1 亀岡市民の幸福度の基本形

	係数	
性別		
女性ダミー	0.4136	[2.65] ***
年齢		
年齢	-0.5326	[-2.22] **
年齢の二乗	0.0672	[0.69] ***
居住年		
居住年	-0.0017	[-0.02]
所得		
500万円以上ダミー	0.9298	[3.81] ***
学歴		
高校ダミー	0.8499	[3.43] ***
短大・高専・専門学校ダミー	1.1671	[4.04] ***
大学・大学院ダミー	1.5939	[5.49] ***
その他ダミー	0.3012	[0.29]
職業		
経営者・役員ダミー	-0.0981	[0.18]
非正規社員ダミー	-0.0699	[0.32]
自営業主ダミー	0.54	[1.73] *
学生ダミー	0.4588	[0.9]
無業ダミー	0.1609	[0.71]
N	756	
対数尤度	-1081.3207	
Pseudo R2	0.0343	
自由度	18	
chi2	76.7048	
p	0	

* $p < 0.1$, ** $p < 0.05$, *** $p < 0.01$ 。[] 内は t 値である。

4 . 亀岡市に対する評価と資料館利用の関係

ここでは、問 1 で尋ねた「亀岡市に対する評価」が資料館の利用にどの程度、影響を及

ばしているのかについて検討する。被説明変数を、「0 = 資料館を利用したことがない」、「1 = 利用したことがある」とし二項ロジット分析を試みた。

最初に説明変数として亀岡市に対する評価のみを取り扱うケースを分析する。その結果は表2の通りである。

これから、亀岡市の評価が高い項目の中で、「雇用の環境（問1.1）」と「育児の環境（問1.6）」以外の項目で評価が高いと市民は資料館を利用していることが分かる。次に、先の基準型に亀岡市に対する評価をそれぞれ説明変数として考慮し推定する。つまり、年齢などの社会経済変数をコントロール変数として推定することになる。その結果は、表3の通りである。

- (1) 「教育の環境（問1.3）」、「治安（問1.9）」、「地方政府の行政サービスの水準（問1.11）」が統計的に有意ではなくなる。
- (2) 最終的に、「交通・インフラの環境（問1.2）」、「地域の所得水準（問1.4）」、「住環境（問1.5）」、「医療や介護の環境（問1.7）」、「自然環境（問1.8）」、「文化的な環境（亀岡市文化資料館等）（問1.10）」が有意である。

つまり、これらへの評価が高くなると資料館の利用に結びつくことが分かる。したがって、資料館の利用促進は単に資料館の評価にとどまらず、亀岡市への評価の程度にも依存していることが明らかになった。

5. 亀岡市文化資料館の利用状況と幸福度の関係

次に、「最近5年間での亀岡市文化資料館の利用状況（問4）」と幸福度の関係を見てみよう。「最近5年間での亀岡市文化資料館の利用状況（問4）」と、幸福度を示す「現在の生活への満足度（問19）」のクロス表は表4の通りである。図1は利用頻度と幸福度の関係をわかりやすくするために描かれている。

資料館の利用が全くない回答者の中で、現在の生活に満足（「まあ満足している」と

図1 利用頻度と幸福度の関係(1)

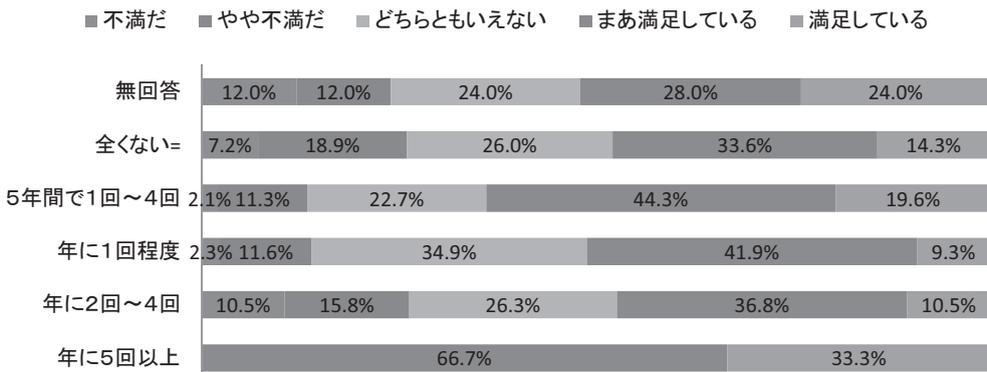


表2 亀岡市に対する評価と資料館利用の関係(1)

		被説明変数：0 = 資料館を利用したことがない、1 = 利用したことがある										
問1.1 雇用の環境	-0.0153 [-0.12]											
問1.2 交通・インフラの環境	0.3072 [3.10]***											
問1.3 教育の環境	0.2331 [1.72]*											
問1.4 地域の所得水準	0.4175 [2.65]***											
問1.5 住環境	0.3194 [2.60]***											
問1.6 育児の環境	0.2058 [1.63]											
問1.7 医療や介護の環境	0.2864 [2.56]**											
問1.8 自然環境	0.3395 [2.56]**											
問1.9 治安	0.1774 [1.61]											
問1.10 文化的な環境(亀岡市文化資料館など)	0.3098 [2.48]**											
問1.11 地方政府の行政サービスの水準	0.3459 [2.54]**											
N	719	732	725	720	731	726	730	739	735	727	728	
対数尤度	-378.6111	-378.22	-378.6002	-371.3609	-379.3089	-380.2805	-379.2518	-382.6738	-382.5147	-377.459	-380.0604	
Pseudo R2	0	0.0127	0.0039	0.0098	0.0093	0.0035	0.0088	0.0089	0.0034	0.0082	0.0087	
自由度	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	
chi2	0.0155	9.7561	3.001	7.325	7.0882	2.6826	6.7114	6.8388	2.6326	6.2651	6.6519	
p	0.901	0.0018	0.0832	0.0068	0.0078	0.1015	0.0096	0.0089	0.1047	0.0123	0.0099	

* p < 0.1, ** p < 0.05, *** p < 0.01. [] 内は t 値である。

表3 亀岡市に対する評価と資料館利用の関係(1)

	被説明変数 0 = 利用したことがない、1 = 利用したことがある				
問1.1 雇用の環境	-0.022 [-0.16]				
問1.2 交通・インフラの環境		0.2424 [2.27]**			
問1.3 教育の環境			0.2167 [1.48]		
問1.4 地域の所得水準				0.3941 [2.35]**	
問1.5 住環境					0.3845 [2.88]***
問1.6 育児の環境					
問1.7 医療や介護の環境					
問1.8 自然環境					
問1.9 治安					
問1.10 文化的な環境（亀岡市文化資料館など）					
問1.11 地方政府の行政サービスの水準					
性別					
女性ダミー	0.1823 [0.81]	0.1911 [0.85]	0.1571 [0.70]	0.1883 [0.82]	0.1597 [0.70]
年齢					
年齢	-0.1186 [-0.31]	-0.0768 [-0.20]	-0.0322 [-0.08]	-0.0254 [-0.07]	-0.0162 [-0.04]
年齢の二乗	0.0468 [1.23]	0.0406 [1.07]	0.0352 [0.94]	0.0356 [0.93]	0.0353 [0.95]
居住年					
居住年	0.1707 [1.55]	0.1731 [1.57]	0.1706 [1.55]	0.1887 [1.68]*	0.1928 [1.77]*
所得					
500万円以上ダミー	0.4008 [1.14]	0.3939 [1.12]	0.3097 [0.86]	0.3542 [1.01]	0.4319 [1.22]
学歴					
高校ダミー	0.6501 [1.79]*	0.621 [1.71]*	0.6468 [1.78]*	0.6213 [1.66]*	0.5604 [1.53]
短大・高専・専門学校ダミー	0.5636 [1.29]	0.5769 [1.32]	0.5495 [1.26]	0.5329 [1.20]	0.4586 [1.04]
大学・大学院ダミー	1.3204 [3.19]***	1.3005 [3.15]***	1.2751 [3.08]***	1.3035 [3.09]***	1.1792 [2.83]***
その他ダミー	-12.8417 [-0.01]	-11.9699 [-0.01]	-12.6882 [-0.01]	-12.6694 [-0.01]	-12.4777 [-0.01]
職業					
経営者・役員ダミー	0.5883 [0.88]	0.5784 [0.85]	0.6629 [0.98]	0.7126 [1.05]	0.6241 [0.92]
非正規社員ダミー	0.3519 [0.99]	0.2918 [0.82]	0.2298 [0.65]	0.2735 [0.77]	0.3115 [0.87]
自営業主ダミー	0.5454 [1.21]	0.5883 [1.32]	0.5098 [1.13]	0.6628 [1.48]	0.5747 [1.27]
学生ダミー	1.0814 [1.34]	1.1097 [1.37]	1.029 [1.27]	1.1143 [1.37]	1.1347 [1.39]
無業ダミー	0.6338 [1.76]*	0.6032 [1.69]*	0.6218 [1.75]*	0.5627 [1.56]	0.6472 [1.80]*
N	700	713	705	702	714
対数尤度	-338.2689	-340.7263	-340.7579	-333.7402	-339.7805
Pseudo R2	0.086	0.0904	0.0824	0.0901	0.0935
自由度	19	19	19	19	19
chi2	63.6563	67.7351	61.1712	66.0722	70.1203
p	0	0	0	0	0

* p<0.1, ** p<0.05, *** p<0.01。[]内はt値である。

0.1897 [1.38]					
	0.2268 [1.93]*				
		0.4599 [3.11]***			
			0.0632 [0.53]		
				0.2902 [2.17]**	
					0.2232 [1.56]
0.161 [0.71]	0.2066 [0.92]	0.1597 [0.71]	0.1363 [0.61]	0.1189 [0.53]	0.189 [0.84]
-0.0752 [-0.20]	0.0192 [0.05]	-0.0266 [-0.07]	-0.0876 [-0.23]	-0.0351 [-0.09]	-0.0613 [-0.16]
0.041 [1.10]	0.0309 [0.82]	0.0371 [0.99]	0.0402 [1.08]	0.0355 [0.93]	0.039 [1.04]
0.1681 [1.53]	0.1727 [1.59]	0.2002 [1.83]*	0.1798 [1.65]*	0.1823 [1.65]*	0.183 [1.68]*
0.47 [1.33]	0.432 [1.20]	0.4227 [1.19]	0.4016 [1.14]	0.3829 [1.07]	0.4233 [1.20]
0.5919 [1.62]	0.6219 [1.72]*	0.5484 [1.51]	0.6104 [1.69]*	0.5743 [1.57]	0.5883 [1.63]
0.507 [1.16]	0.5569 [1.28]	0.5011 [1.14]	0.5365 [1.24]	0.5309 [1.21]	0.5093 [1.18]
1.2305 [2.96]***	1.3078 [3.16]***	1.1548 [2.80]***	1.2886 [3.14]***	1.2821 [3.07]***	1.2354 [3.00]***
-12.7315 [-0.01]	-12.7142 [-0.01]	-12.69 [-0.01]	-12.7772 [-0.01]	-12.3783 [-0.01]	-11.8184 [-0.02]
0.6487 [1.01]	0.6838 [0.99]	0.6326 [0.93]	0.6071 [0.90]	0.5959 [0.89]	0.5837 [0.87]
0.3289 [0.93]	0.356 [0.99]	0.3079 [0.86]	0.3184 [0.90]	0.2766 [0.78]	0.3033 [0.86]
0.4737 [1.03]	0.5742 [1.27]	0.5855 [1.31]	0.5735 [1.28]	0.5799 [1.28]	0.6076 [1.37]
1.0958 [1.35]	1.1325 [1.39]	1.1006 [1.35]	1.09 [1.35]	1.029 [1.26]	1.081 [1.33]
0.653 [1.82]*	0.6507 [1.81]*	0.673 [1.86]*	0.6661 [1.86]*	0.6731 [1.87]*	0.6296 [1.76]*
706 -340.6878	710 -341.2733	720 -341.6981	717 -345.2261	708 -337.3971	709 -341.7843
0.0863	0.0871	0.0951	0.0808	0.0932	0.0882
19	19	19	19	19	19
64.3359	65.1562	71.7916	60.7047	69.3789	66.1604
0	0	0	0	0	0

問4 最近5年間での亀岡市文化資料館の利用状況のクロス表と、問19 満足度のクロス表

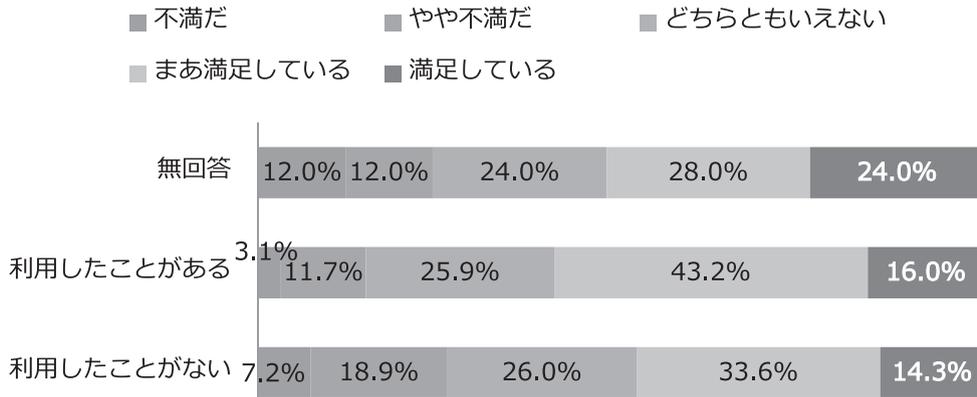
	問4 最近5年間での亀岡市文化資料館の利用状況	問4 最近5年間での亀岡市文化資料館の利用状況					合計
		不満だ	やや不満だ	どちらともいえない	まあ満足している	満足している	
問4 最近5年間での亀岡市文化資料館の利用状況	年に5回以上	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	2 66.7%	1 33.3%	3 100.0%
	年に2回～4回	2 10.5%	3 15.8%	5 26.3%	7 36.8%	2 10.5%	19 100.0%
	年に1回程度	1 2.3%	5 11.6%	15 34.9%	18 41.9%	4 9.3%	43 100.0%
	5年間で1回～4回	2 2.1%	11 11.3%	22 22.7%	43 44.3%	19 19.6%	97 100.0%
	全くない	41 7.2%	108 18.9%	149 26.0%	192 33.6%	82 14.3%	572 100.0%
合計	無回答	3 12.0%	3 12.0%	6 24.0%	7 28.0%	6 24.0%	25 100.0%
		49 6.5%	130 17.1%	197 26.0%	269 35.4%	114 15.0%	759 100.0%

「満足している」を合計)と答えた人の割合は47.9%である一方、年2回～4回の利用者の満足と答えた人の割合は47.3%とわずかに低い。しかし、これ以外の利用者の満足と答えた人の割合は、「全くない」の割合を超えている。特に、年に5回以上資料館を利用する人の場合は、満足と答えた人の割合は100%である。このように、クロス表からは一般的に資料館を利用する人の幸福度は高いと言える。表5と図2では、資料館を「利用したことがない」場合と「利用したことがある」場合の幸福度の状況が示されており、資料館を利用したことがある人の回答者は幸福度が高いことが分かる。

表5 利用の有無と、問19 満足度のクロス表

		問19 満足度					合計
		不満だ	やや不満だ	どちらともいえない	まあ満足している	満足している	
利用の有無	利用したことがない	7.2%	18.9%	26.0%	33.6%	14.3%	100.0%
	利用したことがある	3.1%	11.7%	25.9%	43.2%	16.0%	100.0%
	無回答	12.0%	12.0%	24.0%	28.0%	24.0%	100.0%
合計		6.5%	17.1%	26.0%	35.4%	15.0%	100.0%

図2 利用頻度と幸福度の関係(2)



しかし、この関係は性別などの社会経済変数に影響を反映しており表面的なものである可能性もあるため、性別や年齢、所得、居住年、学歴、職種といった社会経済変数をコントロール変数として分析する必要がある。そこで、こうした社会経済変数をコントロール変数として順序ロジット分析を行なった結果が表6で示されている。参考に、コントロール変数を考慮しない推定も載せている。コントロール変数を考慮しないケースでは、「利用したことがある」が有意水準1%で統計的にも有意である。そして、コントロール変数を加えたケース2を見ると、「利用したことがある」の係数は小さくなっているものの正であり、かつ有意水準10%で統計的にも有意である。したがって、資料館を利用することで幸福度が上がると言うことができる。

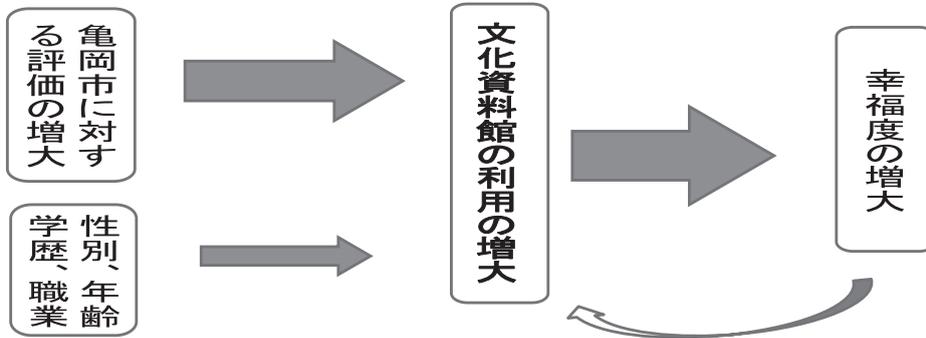
表6 順序ロジット分析：利用の有無と幸福度の関係

		被説明変数 = 幸福度 1 = 不幸だ、...、5 = 幸福だ	
		ケース1	ケース2
資料館利用の有無	利用したことがある	0.4313 [2.72]***	0.2923 [1.75]*
性別	女性		0.4581 [2.87]***
年齢	年齢		-0.4653 [-1.90]*
	年齢の二乗		0.0563 [2.20]**
居住年	居住年		0.0074 [0.11]
所得	500万円以上ダミー		0.9789 [3.93]***
学歴	高校ダミー		0.6887 [2.67]***
	短大・高専・専門学校ダミー		0.9685 [3.23]***
	大学・大学院ダミー		1.3468 [4.46]***
	その他ダミー		0.1567 [0.15]
職業	経営者・役員ダミー		-0.1143 [-0.21]
	非正規社員ダミー		-0.0865 [-0.39]
	自営業主ダミー		0.5606 [1.75]*
	学生ダミー		0.4186 [0.82]
	無業ダミー		0.1419 [0.62]
	N	734	732
	自由度	-1080.4925	-1044.7639
	Pseudo R2	0.0034	0.0338
	自由度	1	19
	chi2	7.4464	73.0029
	p	0.0064	0

* p < 0.1, ** p < 0.05, *** p < 0.01。[] 内は t 値である。

これまでの結論を図式的にまとめると、市民の幸福度増大のメカニズムを図3のように描くことができる。

図3 幸福度増大のメカニズム



6. 自由意見の内容

今回のアンケート調査では、自由意見として236名から回答が得られている。ここでは、テキストマイニングという手法で自由意見の回答の分析を試みる¹¹⁾。テキストマイニングは、得られた文章を単語や句に分割し、これらの構造を抽出することによって情報を引き出そうとするものである。

重要と思われる、かつよく頻出する単語や句（20回以上）を抽出すると表7のようになる。もっとも多く使われた単語は「資料館」であり、62名によって使われ、「亀岡」、「施設」、「新資料館」と続く。このことから、回答者は「資料館」、「亀岡」、「施設」および「新資料館」などの語を使いながら回答していることが分かる。そして、「新資料館」の次に「子供」が多く用いられており、回答者の多くが「子供」について関心を持っているのが興味深い点でもある。

最初に、頻出回数が一番多い「資料館」について見てみよう。「資料館」という単語と「施設」の単語を同時に使用している回答者が17名、「亀岡」の語を同時に使用している回答者が16名、「子供」の語を同時に使用している回答者が15名いる。単語間の関係は図4のようなWebグラフを用いて示すことができる。ここでは「資料館」とそれぞれの単語を結ぶ線の太さが、当該単語と「資料館」の語と同時に使われている回数的大小を示してい

表7 頻出する単語・句

単語・句	回数
資料館	62
亀岡	52
施設	46
新資料館	41
行く	38
子供	38
くる	30
利用	30
市民	29
ギャラリー	25
つくる	22
建物	20

11) 分析に当たってはIBM SPSS Text Analytics for Surveysを用いた。

図4 Web グラフ：資料館

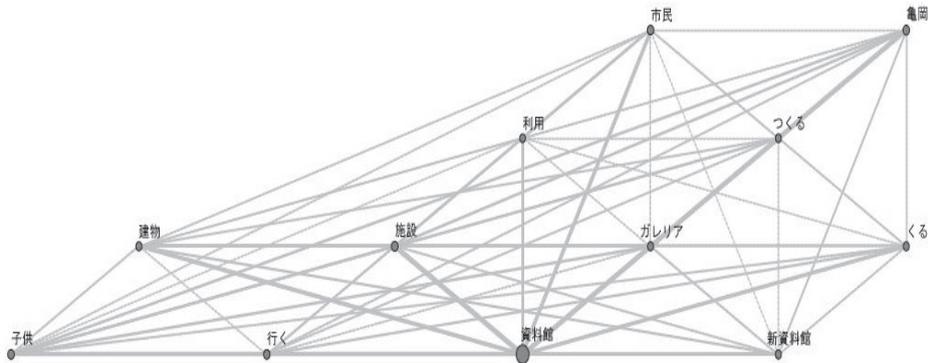
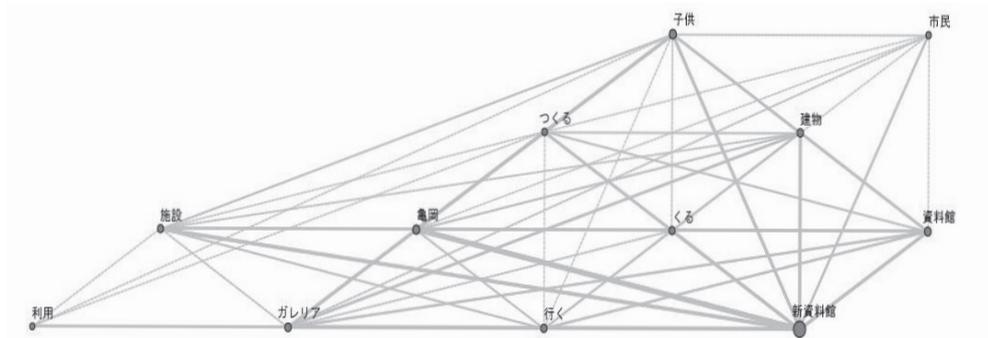


図5 Web グラフ：新資料館



る。図3では少し分かりにくい、「資料館」の語と関係が深い語が確認される。「資料館」と2番目に関係が深い語は「亀岡」である。回答を見てみると、亀岡市の現状や市への要望を述べながら資料館についての感想や意見を述べているのがほとんどである。その内容は、「亀岡を知ることができる資料館にしてほしい」、「トロッコ列車と資料館を関係づける」、「資料館を亀岡のイメージアップのために使う」、「図書館と連携してほしい」、「過去と現在の架け橋になるような資料館になってほしい」、「亀岡市の中核に資料館を位置づけて欲しい」、「単独の施設に行くのは難しいので併設した施設があれば良い」などアンケート調査で得られた内容に沿っている。ただ、「一部の愛好家だけの資料館ではなくて多くの人が行きたくなるような資料館にしてほしい」、「資料館はいらなくてもっと教育にお金を使ったほうが有効である」など、選択式のアンケート調査では得られないような回答もあった。

次に、「新資料館」を見てみよう。「新資料館」のWebグラフが図5に描かれている。最も関係が強いのは「亀岡」という語である。この場合も、亀岡市の自然環境や施設の状況などに言及しながら、新資料館に関する意見を述べているケースがほとんどである。新資料館についての意見には賛成（提案）の立場と反対の立場の2つに分けられる。賛成あ

るいは新資料館の提案に関する意見としては、「資料館が充実したものになり亀岡が活発になればいい」、「湯の花温泉などが利用でき新資料館を新たな観光施設等の場として捉える」、「新資料館を有意義な利用価値のある建物にしてほしい」、「一流のショップやカフェを呼べるような複合施設にするか、最悪でも児童文化センターのように子供の知育に役立つ施設にして欲しい」、「行きたくなるように様々な施設を併設する」などである。内容的には、賛成の立場あるいは提案をする立場の回答が大半であったが、反対の意見としては、「新資料館に市民の税金をつぎ込む事は無駄なことである」、「新資料館よりもコンサートや発表会などができるという施設が欲しい」、「基本的には遊び場や飲食店等の併設は反対である」などもあった。

興味深い現象の1つとして、「資料館」と「新資料館」の中で「子供」に言及するケースが多い点を挙げる事ができる。これは、アンケート調査の中の「あなたは、「新資料館」の事業で、利用・期待すること(○1つ)(問10)」に対する回答と関係すると考える事ができる。つまり、これに対する回答では、「子供向けイベントの充実を望む」と答える回答者が、「強く思う」「思う」を合わせたものの比率が6番目に多いという状況を反映しているものと思われる。

「施設」の語もよく使われており、「子供」と「資料館」、「新資料館」と同時に使われてケースが多かった。内容は、資料館に対する現状の意見と新資料館に望む意見が大半であり、アンケート調査結果に沿った内容である。ただ、「交通の便が悪いのでどんなに立派な施設でも利用できない、したがって弱者に対する配慮をお願いする」という意見もあった。

テキストマイニングによる分析を通じて、自由回答の内容はアンケート調査結果に沿った内容であることが確認できた。さらに、自由回答を寄せた回答者の多くは、亀岡市や後世代のことを考慮しながら資料館および新資料館のことを把握しようとしているということが確認することができた。

7. おわりに

本研究では、アンケート調査をもとに地域の文化行政の拠点施設の一つである文化資料館が住民の幸福度にどのように影響を与えているのかについて分析した。その結果、(1)資料館を利用することで市民の幸福度は高まる、(2)どれだけ資料館を利用するかは資料館に対する評価だけではなく、亀岡市への評価の程度にも依存している、ということがわかった。このことは、資料館のような文化施設の存在はそれ自体が住民の幸福度を引き上げるか、施設の整備だけではなく、それを運営する自治体に対する信頼を引き上げることが人々の幸福度の増進には欠かせないことを示している。すなわち、資料館だけではなく市政全般に対する市民の理解が深まるよう、分かりやすい言葉での説明など情報提供が市民の幸福度の向上には必要不可欠である。こうした結果は、たとえば行政サービスに対する満足度の規定要因を分析した野田(2011)などの先行研究とほぼ一致するものである¹²⁾。

このことから、地域への愛着や誇りを増進する機能が資料館には求められているといえよう。

またテキストマイニングの結果から、自由記述では「子供」という単語と資料館を結びつけて回答している人も多いことがわかった。すなわち、市民は現時点だけではなく、将来世代のこともある程度考慮しながら、資料館のあり方を考えているといえよう。資料館のような文化施設の運営に当たっては、将来世代である若者の意見を積極的に取り入れることも重要であることはいまでもなく、最近では、いくつかの自治体で行政計画の策定に高校生など未成年者も参画する試みが行われている。高校生などを対象にしたアンケート調査を実施している自治体は多く見られるが、たとえば岡山県真庭市は「第2次真庭市総合計画」(2014～)の策定にあたって市民会議を開催し、その参加者の半数は高校生によって構成され活発な議論が交わされた¹³⁾。また、兵庫県豊岡市では「豊岡市生物多様性地域戦略」(2013～2027)の策定にあたって高校生も正式な委員として参加している¹⁴⁾。本研究を実施した亀岡市においても、新資料館構想を議論した「シンボルプロジェクト「自然・文化 次代継承」プロジェクトチーム」は、中学生や高校生、大学生を対象にしたワークショップなどを開催し、若年層の意見を提言に反映した。今後、ますます加速する地方の人口減少の中で、既存の審議会などの仕組みでは必ずしも若者の参加の機会は十分に確保されてきたとはいえず、こうした新しい仕組み作りは今後ますます重要となることは言うまでもない。

本稿での分析結果は、その後、亀岡市新資料館構想策定委員会(2014～2015)における議論でも活用された。各地で文化施設のあり方が大きく問われる中、本稿がそれを考える際の一助になれば幸いである。

参考文献

- Easterlin, Richard A. (1974) "Does Economic Growth Improve the Human Lot? Some Empirical Evidence," in Paul A. David and Melvin W. Reder, eds. *Nations and Households in Economic Growth: Essays in Honor of Moses Abramowitz*, NY: Academic Press, p.89-125.
- Frey, Bruno S. (1997), "The evaluation of cultural heritage: Some critical issues", in M. Hutter and I. Rizzo, eds, "Economic perspectives on cultural heritage", St. Martin's Press, New

12) 野田(2011)では、大阪府を中心に実施したアンケート調査をもとに、行政サービスに対する満足度の規定要因として政府規模そのものは影響しておらず、住民の期待と比べた行政サービスの質、たとえば公務員の対応が有効であることを示した。また、小規模な自治体ほど地域への愛着や住民自身の有効感の醸成が住民の満足度を向上させている。

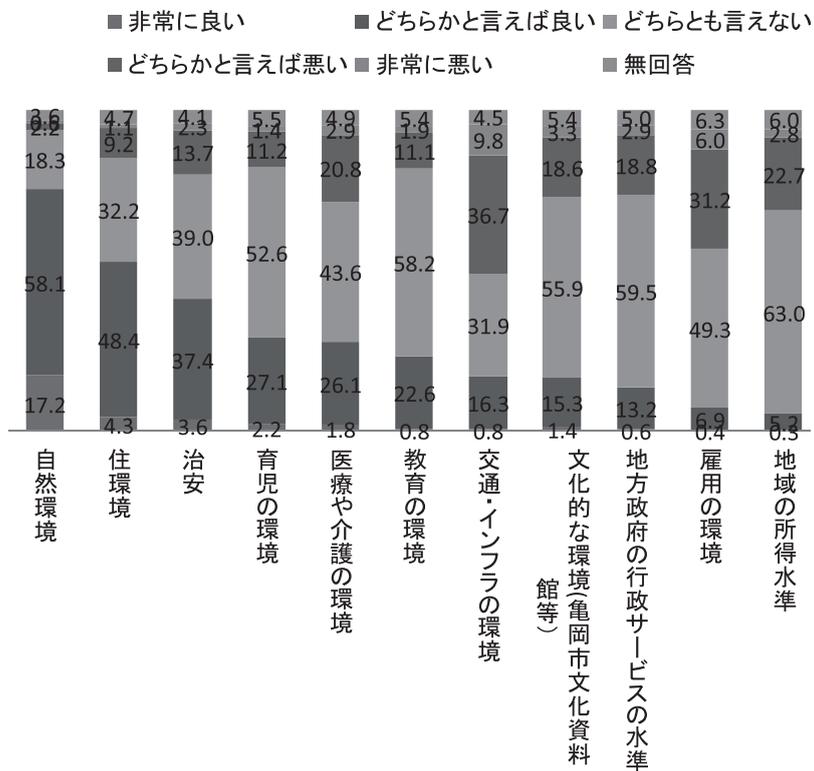
13) 総合計画策定に際して開催された市民会議の詳細は真庭市ものがたり会議委員(2014)に詳しい。この市民会議には公募で市民62人が集まり、うち半数が高校生で会った。また、高校生だけの委員で構成される「学生版ものがたり会議」もあわせて開催された。

14) 豊岡市生物多様性地域戦略検討委員会の委員17名のうち、高校生は5人が正式な委員として参加している。また、同検討委員会は5回開催されているが、この他にも高校生委員による意見交換会や高校生部会(計5回)が開催されるなど、若年層の意見の反映に積極的に取り組んでいる。

- York. Throsby David(2001)“Economics and Culture”, Cambridge University Press.
- 池上惇 (2000)「文化と固有価値の経済学」『文化経済学』第2巻第4号、1-14ページ。
- 池内淳 (2003)「仮想評価法による公共図書館の経済評価」『日本図書館情報学会誌』第49巻第3号、89-107ページ。
- 大竹文雄・白石小百合・筒井義郎 (2010)『日本の幸福度 格差・労働・家族』日本評論社。
- 大橋敏博 (2006)「文化施設の構造改革と評価に関する一考察」『総合政策論叢』第11号、47-61ページ、島根県立大学総合政策学会。
- 小野久美子・小島隆也 (2007)「文化施設を対象とした来訪者の利用様態と評価の視点」、日本行動計量学会第35回大会報告論文。
- 垣内恵美子・奥山忠裕・寺田鮎美 (2009)「美術館を対象とした市民の便益評価－倉敷市大原美術館を事例に－」『日本都市計画学会論文集』第44号第3巻、403-408ページ。
- 垣内恵美子、吉田謙太郎 (2002)「CVMによる「文化資本」の便益評価の試み－世界遺産富山県五箇山合掌造り集落の実例研究－」『文化経済学』第3巻第2号、63-74ページ。
- 亀岡市新資料館構想策定委員会 (2016)「亀岡市新資料館構想」。
- 経済協力開発機構 (2015)「主観的幸福を測る」桑原進監訳、高橋しのぶ訳、明石書店。
- 澤村明 (2010)「街並み保存の経済分析手法とその適用 木曾妻籠宿の40年を事例に」『新潟大学経済論集第88巻』19-32ページ。
- 田中鮎夢 (2008)「文化的財の国際貿易：課題と展望」RIETI Discussion Paper Series 08-J-007、独立行政法人経済産業研究所。
- 橋木俊詔 (2013)『「幸せ」の経済学』岩波書店。
- 豊岡市 (2013)「豊岡市生物多様性地域戦略 いのち響きあう豊岡をめざして」
- ニック・ポータヴィー (2012)『幸福の計算式』阿部直子訳、ハンキョウ。
- 野田遊 (2011)「行政サービスに対する満足度の規定要因」『会計検査研究』第43号、73-86ページ。
- 林勇貴 (2012)「消費財型準公共財の便益と評価：芸術・文化施設を中心に」『関西学院経済学研究』第43巻、51-71ページ。
- 真庭市ものがたり会議委員 (2014)「真庭市総合計画策定『ものがたり会議』提言書 山中八咲」
- 文化庁 (2015)「地方における文化行政の状況について(平成25年度)」。

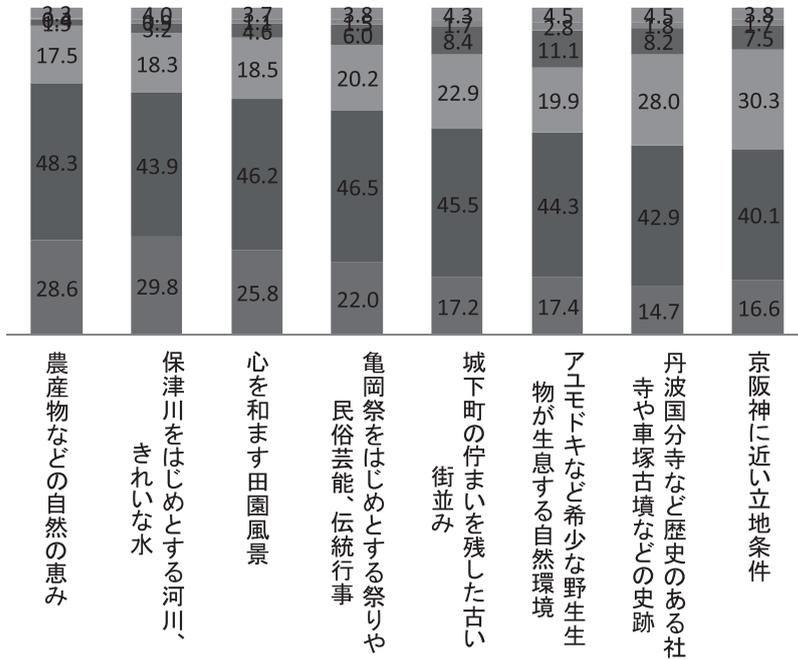
別表

問1 亀岡市に対する評価

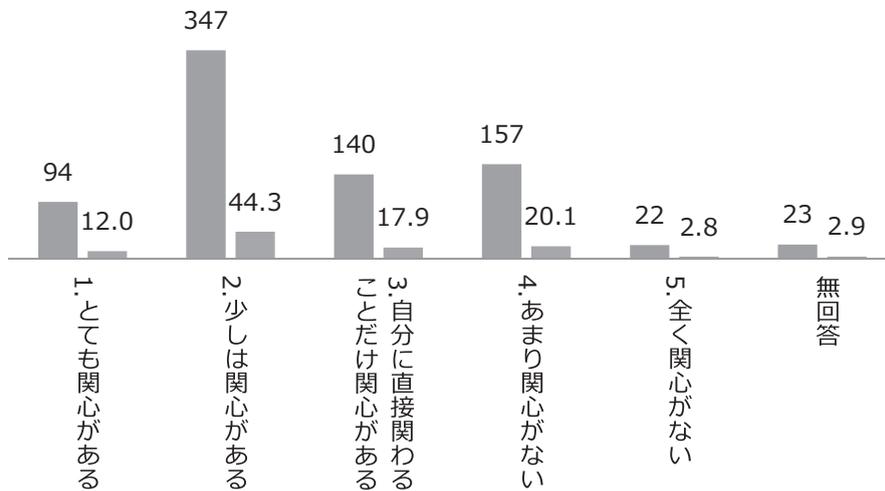


問2 亀岡の魅力(○1つ)

■ 非常に良い ■ どちらかと言えば良い ■ どちらとも言えない
 ■ どちらかと言えば悪い ■ 非常に悪い ■ 無回答

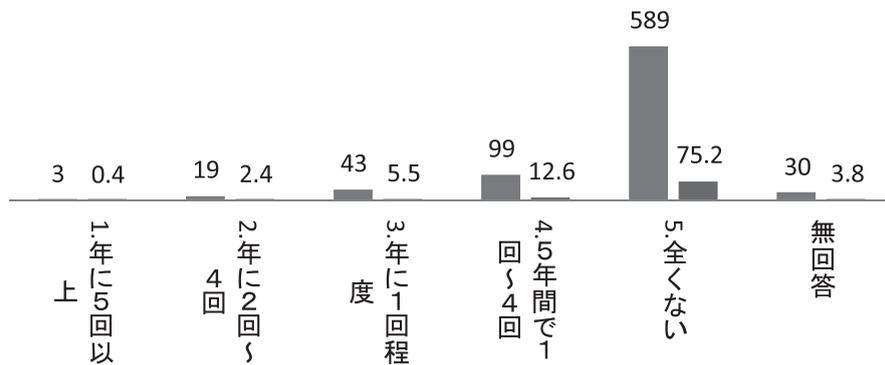


問3 シンボルプロジェクト「自然・文化次代継承」チームの取り組みに対する関心(○1つ)

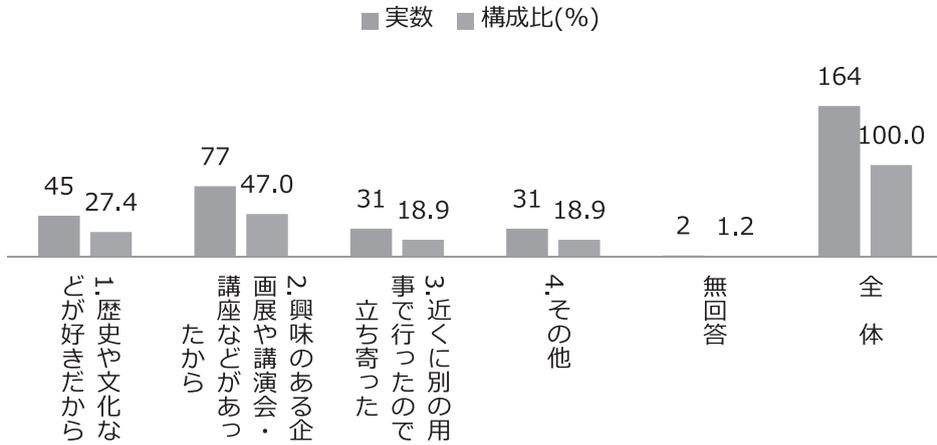


問4 最近5年間での亀岡市文化資料館の利用状況

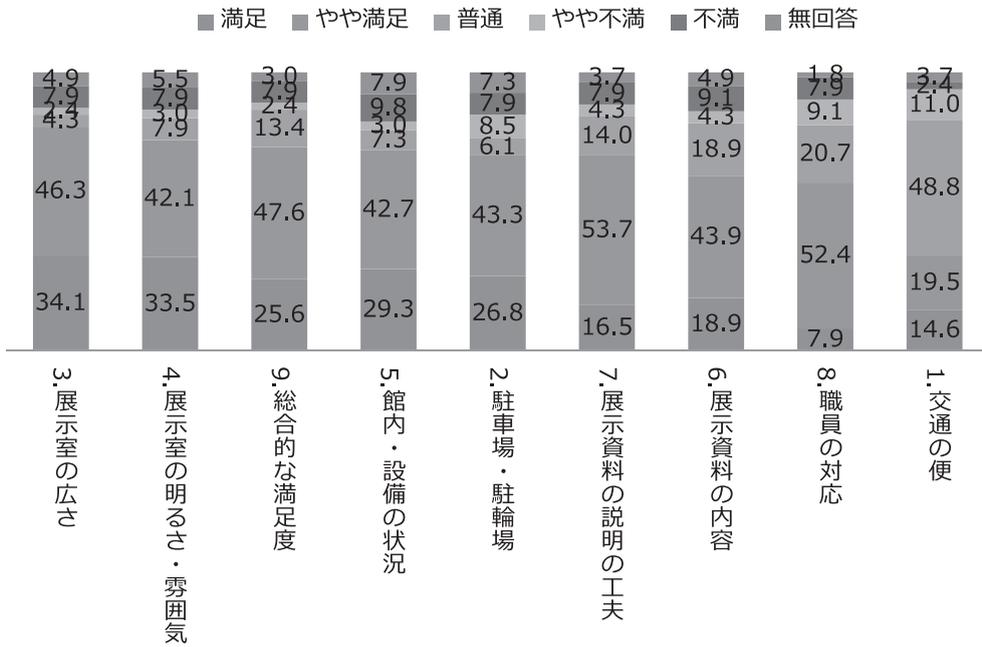
■ 実数 ■ 構成比(%)



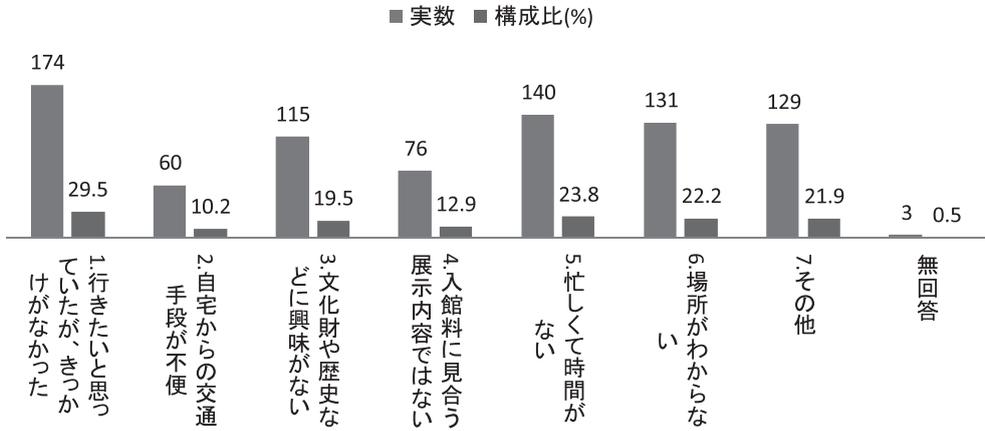
問5 (文化資料館を利用された方のみ回答)文化資料館へ行った理由(複数回答可)



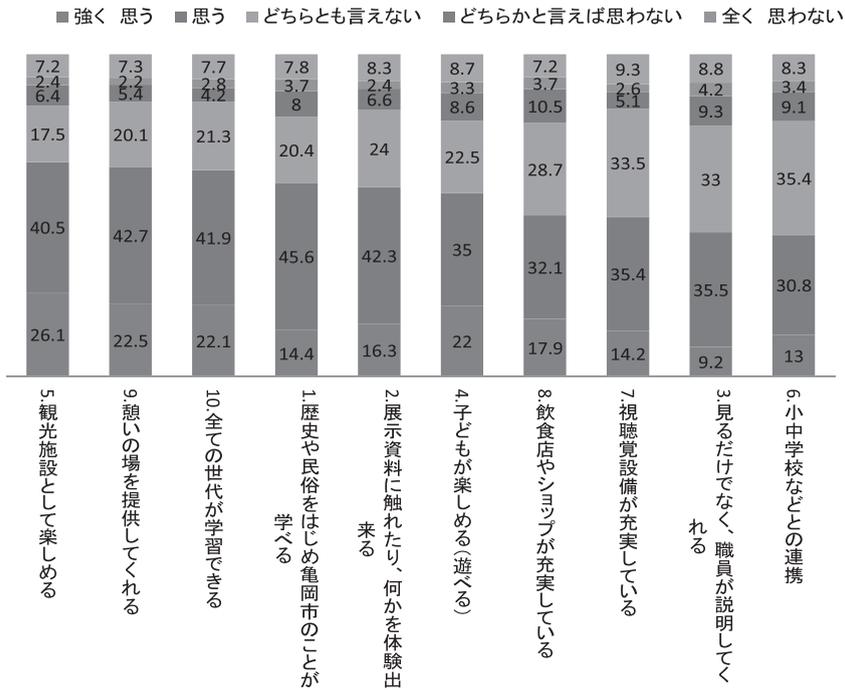
問6 (文化資料館を利用された方のみ回答)文化資料館に対する評価(〇-つ)



問7 (問4で「5.全くない」と回答の方のみ) 5年間文化資料館に行かなかった理由(複数回答可)

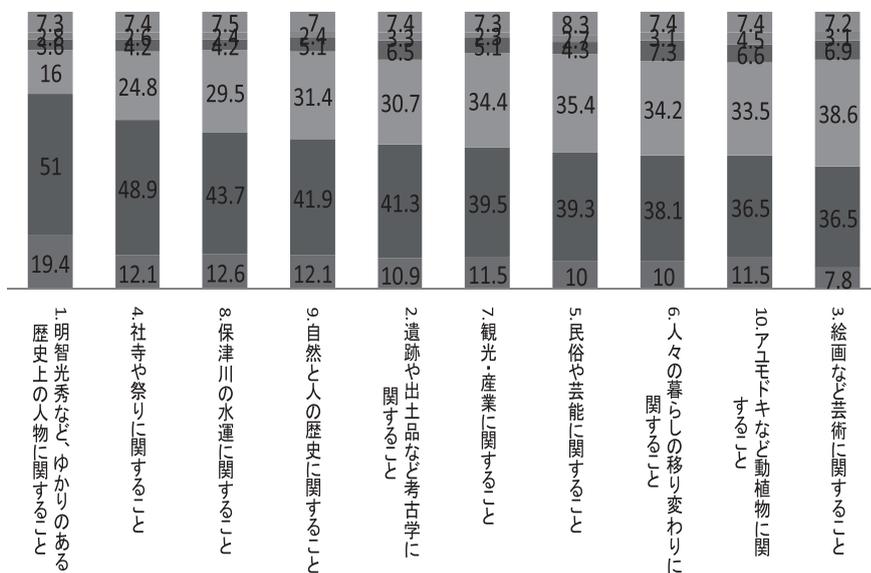


問8 亀岡市民以外の客を案内したくなる「新資料館」とは(複数回答可)



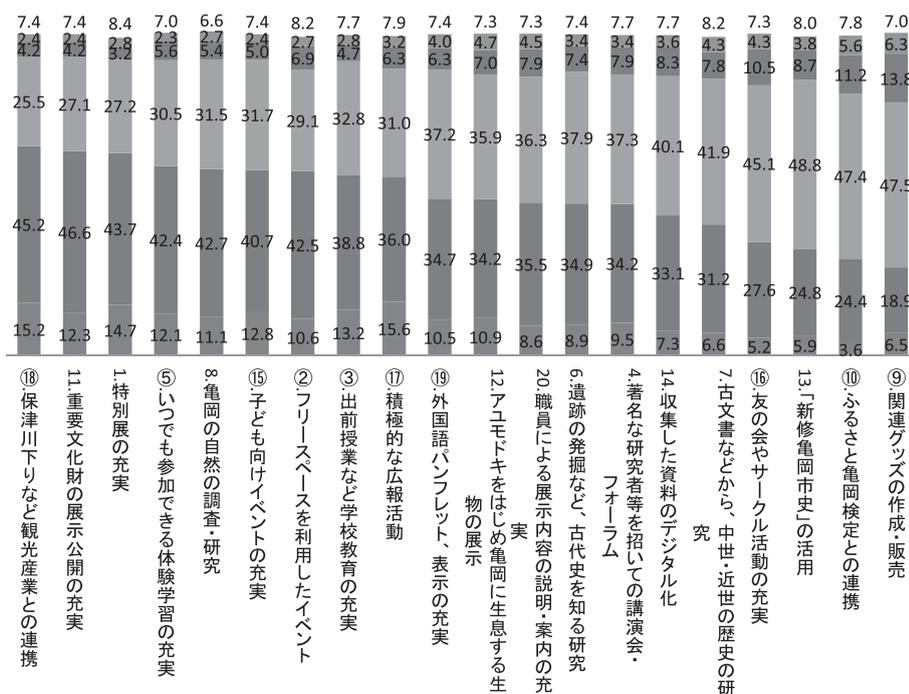
問9 「新資料館」で、亀岡に関して学びたいこと(○1つ)

■ 強く 思う ■ 思う ■ どちらとも言えない ■ どちらかと言えば思わない ■ 全く 思わない ■ 無回答

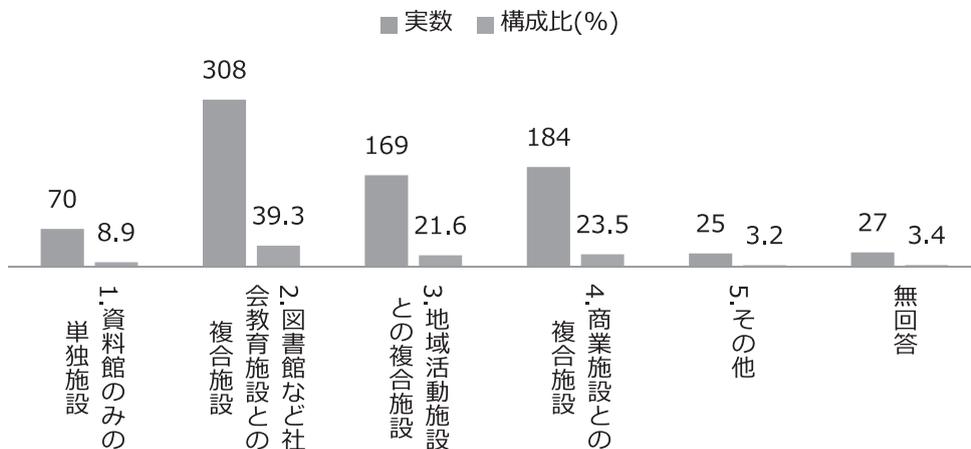


問10 あなたは、「新資料館」の事業で、利用・期待すること(○1つ)

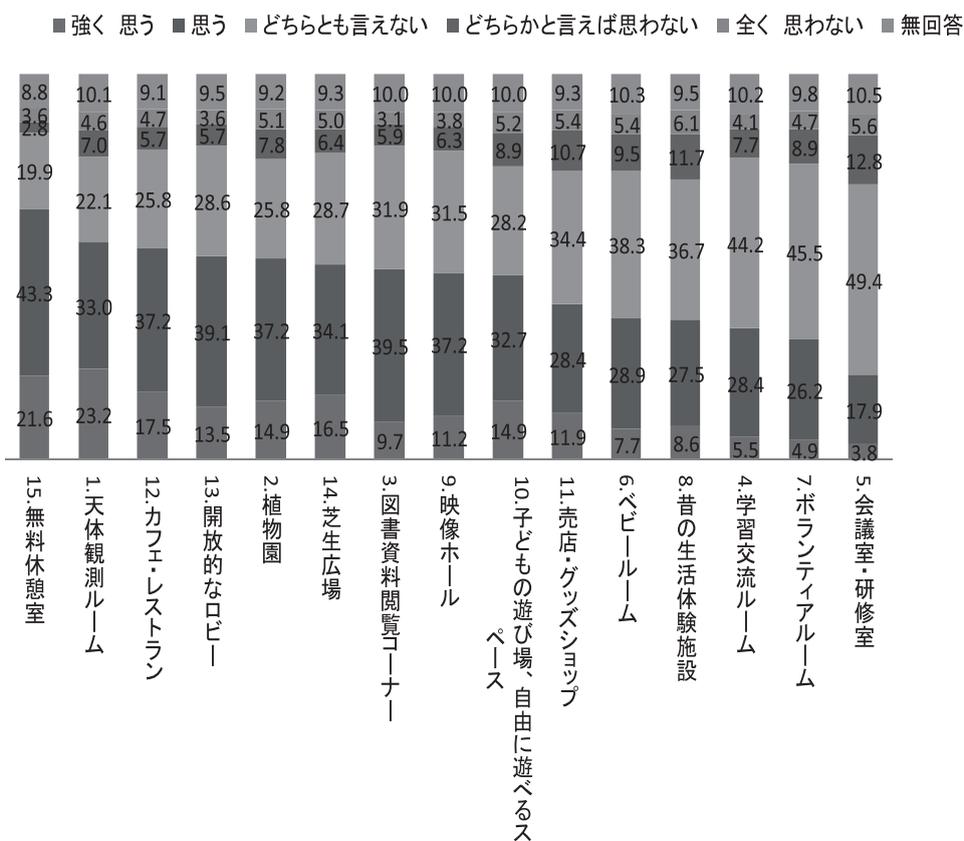
■ 強く 思う ■ 思う ■ どちらとも言えない ■ どちらかと言えば思わない ■ 全く 思わない ■ 無回答

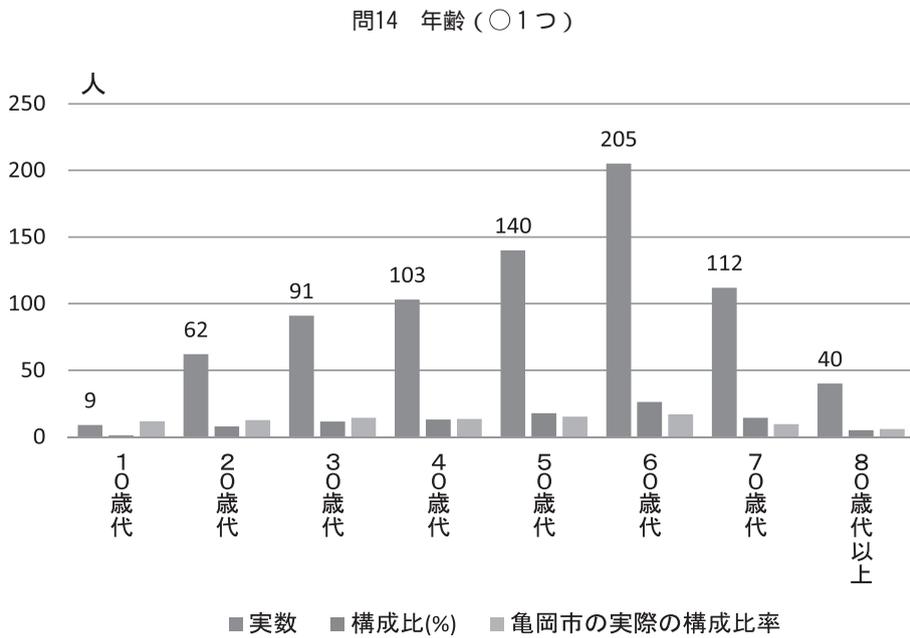
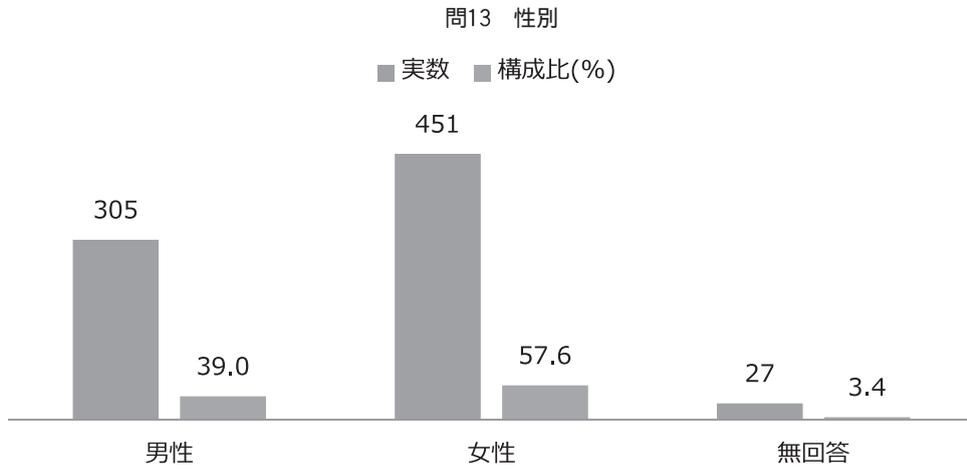


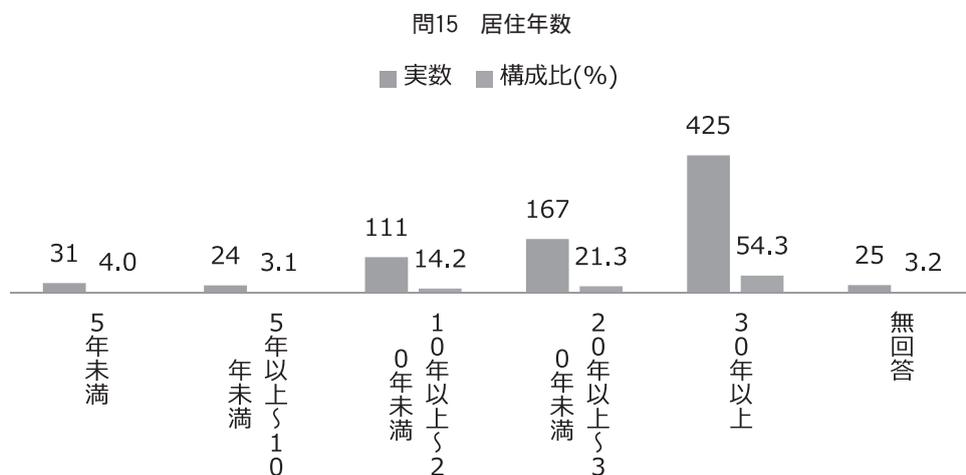
問11 「新資料館」のあり方(○1つ)



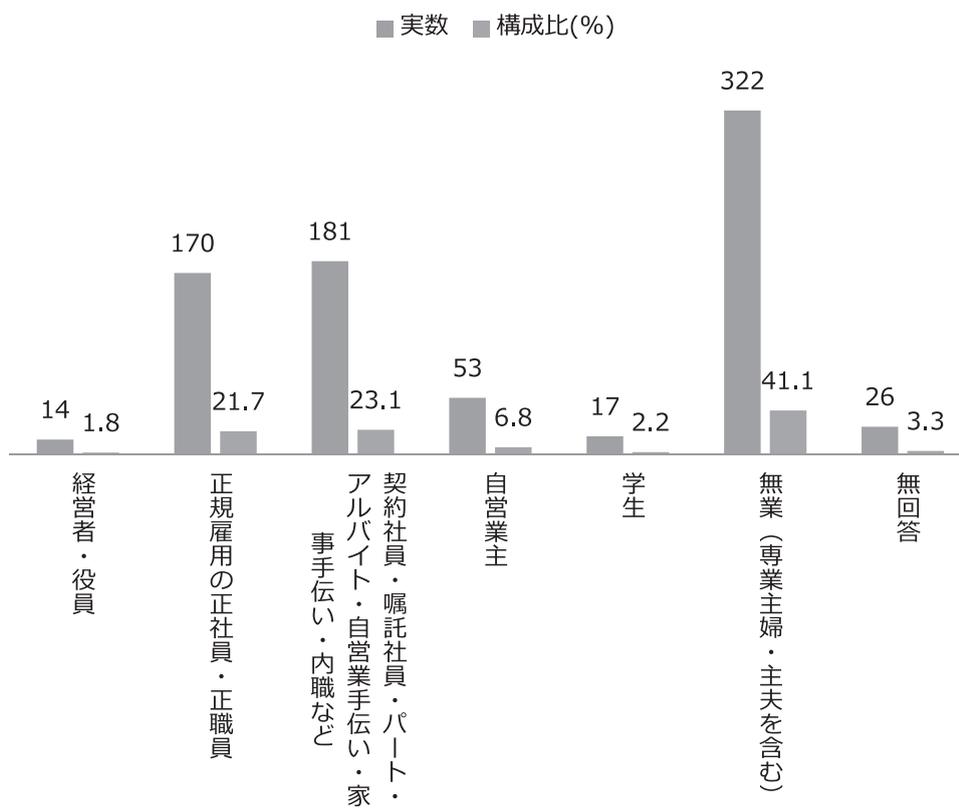
問12 「新資料館」に展示機能以外で望むもの(○1つ)



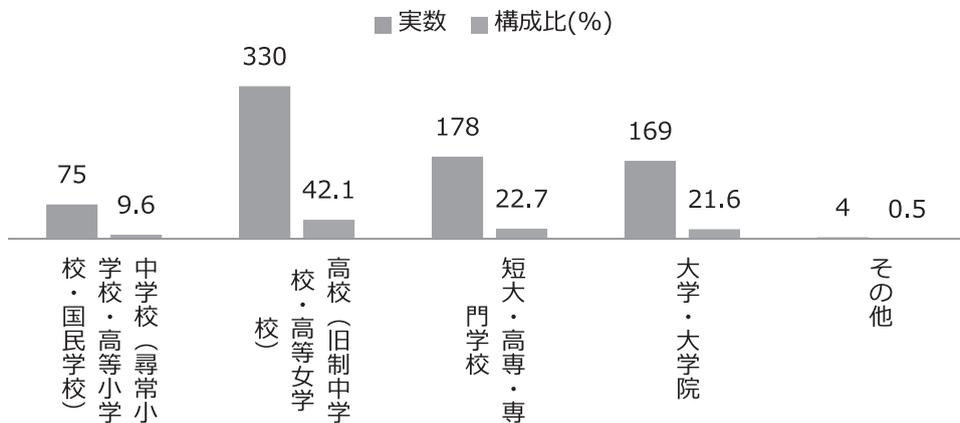




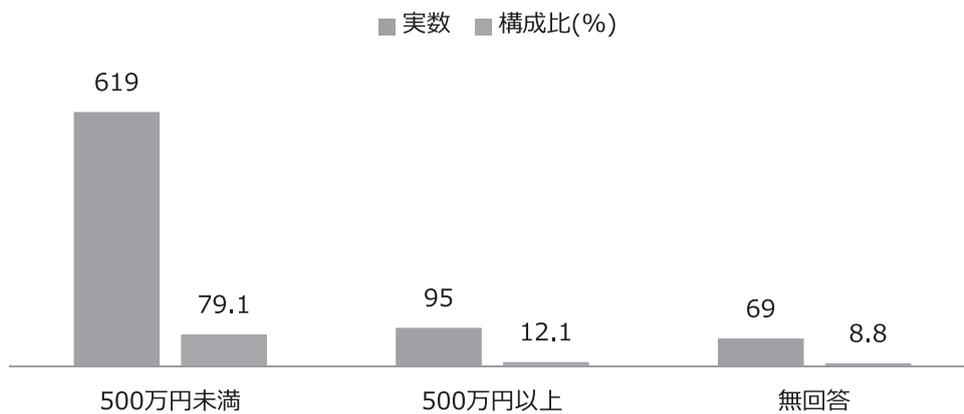
問16 現在の主な従業上の地位（就業形態）



問17 最終学歴



問18 年収



問19 現在の生活に対する全体としての満足度

